

叱ってもらえること

第13期 木田 有亮

「怒るのは自分のため、叱るのは相手のため」。私がとても大事にしている言葉である。

そもそも、私は「叱られる」ことが大嫌いであった。私が保育園の年少だった頃、何が理由かは覚えていないくらい些細な事で保育園の先生にみんなの前で叱られた。この出来事がなぜか当時の私にとって言わば「トラウマ」のようなものになってしまい、とっても元気だった男の子がある日を境に保育園ではもの静かな子になってしまった。それ以来、「叱られる」ことが嫌で、学校に通い始めても「いい子」を演じ続け、極力「叱られる」ことを避けながら生きてきた。勿論、それでも叱られたこともあったが、その度に涙を堪えてきた。

しかし私も大学を卒業してからは社会人。「叱られる」ことなんて日常茶飯事である。どんな事情があろうと「叱られる」度にめげていたらいつになっても出世できないのである。勿論、頭の中ではそんなことは分かっていたのだが、なかなか私の心の奥底にあるトラウマめいたものを拭い去れないままだった。

そんな私のトラウマを拭い去るきっかけをくれたのが小野先生や小野ゼミの先輩であった。小野先生は、私の犯した間違いに対して、いつも愛情をこめて「叱って」くださった。小野先生は頭ごなしに「怒る」ことは決してなさらず、いつでも「叱ること」を通じて私たちに間違いを「気づかせて」くださり、成長の機会を与えてくださった。すると、あんなに「叱られる」ことが嫌だった私に、私のためを思って「叱って」くださったことに対して「感謝」の気持ちが初めて芽生えたのである。それ以来、「叱ってもらえる」ことを前向きに捉えられるようになった。きっと保育園の先生に「叱られた」時も大学生になる前に「叱られた」時も、先生方は同じ気持ちで「叱って」くださったということを今は理解できるが、やはり当時の私は心が幼かったのだと思う。私の「叱られる」ことへの意識をも変えるくらいの愛のある「お叱り」をくださった小野先生には感謝の気持ちでいっぱいです。また、小野ゼミの先輩方も決して自分のためでなく、後輩である私たちのために厳しい意見を投げかけ、時に「叱って」くださった。そんな先輩方にも感謝の意を表するとともに、私も4年生になって3年生の後輩に対してそんな先輩でありたいという気持ちから、自分なりに精一杯行動に移した。

大学生になって「ゼミ」に入らなければきっと「叱ってもらえる」こともなかったし、「小野ゼミ」でなければ「叱られる」ことに対する意識が変わることはなかったであろう。こんな話を他人に話したことはないため、勝手に意識が変わって、勝手に感謝しているだけにすぎないと思われるであろうが、小野ゼミとの出会いは私の人生にとってかけがいのないものになったのは間違いない。あらためて本当にありがとうございました。